

まとめ

齋藤 君子

三人のパネラーによる報告のあと質疑応答が行われた。会場からの質問は日本ではあまり知られていないロシアの学者ベリョースキンの研究方法に集中した。これはやむを得ないことではあったが、シンポジウムの立案者としては少し残念でもあった。口承文芸の比較研究にはさまざまな立場があり、それによってアプローチの仕方も異なる。今回は三人の研究者に発表していただいたが、現時点におけるこの分野の到達点と今後の方向性を論じる場にするには、この一回のシンポジウムでは不十分だったということだろう。

諸民族が伝承してきた神話モチーフの分布を、人類が世界各地に拡散していった道筋と関連付けて説明しようというベリョースキンの仕事に期待し、今後も注目していきたい。彼が収集し整理した膨大なデータに各国の研究者がどこからでも無料でアクセスでき、自由に利用できることは、口承文芸学の今後の発展に大きく寄与するものである。

しかし、問題点もある。口承文芸の物語はそのほとんどが複

数のモチーフが鎖状に繋がって成り立っている。物語を構成する一つのモチーフを物語全体から切り離し、それだけを独立させて比較の対象にすることは不可能だろう。もう一つの問題は、なにをもって同一モチーフとみなすのかということである。たとえば、我が国では「稲葉の素鬼」の中心モチーフとして知られているモチーフがある。「海に落ちた陸の動物が海の動物をだまして並ばせ、その背を渡る」モチーフである。Yu・E・ベリョースキンはこれを抽象化し、「動物が繋がってできた鎖を伝って窮地を脱するモチーフ」と規定し、「動物の鎖」と呼んでいる。彼の規定に従えば、日本の「稲葉の素鬼」とはまったく別の物語もこの項目に入ってしまう。実際にベリョースキンは、猿たちがつながって作った鎖を伝い主人公が樹上から下りるアフリカの昔話をこの項に分類している。ベリョースキンのカテゴリーを利用していると、これと同じような事例にときどき遭遇する。伝播を問題にする場合には、話の筋を抽象化して一つに括ることは間違いないである。

口承文芸の比較研究にとって、一つの文化圏内における説話と他の文化要素とのつながりを考えることも重要である。比較研究では、ともすると物語のストーリーだけに目が向きがちである。一つの説話が他民族からの伝播であるか否かを論ずる前に、その説話その民族の文化全体の中でどのような位置にあり、どのような機能を果たしてきたかを知ることかもしれない。よく似た話が特定の国や地域に限定されず、広範囲に分

布している場合には、人類が拡散する以前から伝承していた物語である可能性がある一方、書物やマスメディアによって伝播した可能性も考えられる。斧原孝さんが指摘されているように、「単独のモチーフの分布だけに目を奪われるのではなく、それがどのような性質の伝承に結びついて展開しているかというところが重要」だろう。

山田仁史さんが述べられたように、現在、幅広い研究者による国際的な協力がますます必要となっている。日本国内には膨大な資料が蓄積されているが、それを海外の研究者が自由に利用できるような形にして提供できれば、我が国の口承文芸学の進展にも繋がるだろう。

今年九月に来日されたベリョースキン氏に直野洋子さんと一緒にお目にかかった折、「神話モチーフのカタログ作成には何人の研究者が携わっているのですか」とぶしつけない質問をすると、「すべてわたし一人で行っています」との返事だった。気の遠くなるほど膨大な仕事をすべて一人でやっていると聞き、思わず「すごい」とうなずいてしまった。いかに彼が超人的な研究者であるとはいえず、これほど大きな仕事は一人では手に余るだろう。細部まで点検するゆとりがないのは当然である。山田仁史さんが強調されているように、比較研究にとって国際的な研究協力・交流は不可欠である。我々日本人研究者にとっても資料の提供や意見交換など、協力できることは多々ある。今後、この分野における実りある活動を期待したい。